

編集ボランティアのページ

●担当編集ボランティア／森 勝己、築城基裕、岩下茂子、石井恵子、堀部 麗

15周年記念フェスティバル

まごころふれあいまつり

日時 平成20年11月2日(日)
10時～15時(雨天決行)

テーマ 「いつでも夢を」

場所 まごころふれあい広場及び九品地公園

★リサイクルバザー・模擬店・楽しい
アトラクション・イベントを開催します！



～NPOの活動を続けて15年～「一宮まごころ」の活動

共に生きる暮らしをめざし、在宅福祉サービスをこの地域で発足して15年。利用される方、協力してくださる方、援助をしていただける方のご支援のおかげで活動をつづけてくることができました。これからも「安心の窓口」として継続できるよう、活動してまいります。

- ◆ 在宅支援…家事・介護の支援
- ◆ ミニデイサービス…毎週火曜
- ◆ 移動サービス…通院等の移動支援
- ◆ ふれあいサロン…毎週木曜
- ◆ レスパイトサービス…障がい児の一時預かり
- ◆ ふれあい広場…毎週月・金曜
- ★ミニデイサービス・ふれあいサロンのボランティアさんを募集しています！

問合せ：NPO法人一宮まごころ
一宮市文京1-4-6 TEL73-8707

ボランティア養成講座に参加して…

先日、本誌の「ボランティア養成講座」に初めて参加してみました。いろいろな講座の中から選んだのは「傾聴ボランティア講座」です。

傾聴ボランティアとは、日頃話をする機会が少なく、悩みなどを一人で抱える高齢者などの気持ちになって「話を聴く」ことに重点を置いたボランティア活動です。カウンセラーではないので悩みや相談の解決はできませんが、話をすることで少しでも元気になってもらうことが目的の「お話し相手」です。話を聞いてもらうだけで気持ちが楽になることってありませんか？ 一般にはまだあまり認知されていない傾聴ですが、高齢化の時代にはますます必要になると言われています。

講座の内容は、「話し相手をよりよく理解するための知識とコミュニケーション技術を学ぶ」ことです。同じ文章でも、読む人によって捉え方や感じ方に違いがあることを実感しました。実際に話を聴くときに、話し手が本当に聞いてほしいこと、訴えたいことをしっかり捉えるのはとても難しそうです。

「話を聞く」だけならそんなに難しくないだろうという気持ちで参加しましたが、日常会話のように自分の意見や気持ちを述べることなく、相手の気持ちを察してひたすら「話を聴く」ことの難しさを痛感しました。

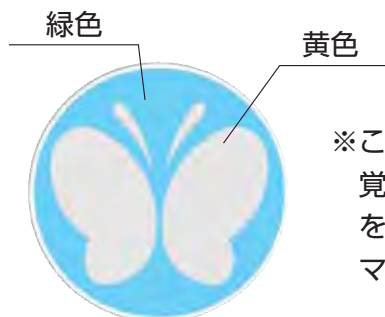
今回、いろいろな世代の方々がたくさんお話をする機会をいただき、ドキドキの初回から4回までの講座はとても楽しくて、あっという間でした。ボランティアに限らず、「人の話を聴く」という意味でもとても勉強になった講座でした。



平成20年6月1日より

— 重度聴覚障害者も
自動車運転可能に —

今まで重度の聴覚障害者は運転免許が取得できませんでしたが、6月1日より改正道路法で取得できるようになりました。初心者マーク同様に見えやすい所に張り、ほかのドライバーに注意を促すために、このマークが作成されました。



※このマークは聴覚の「チョウ」をイメージしたマークです。

「秋の大バザー」に参加してみませんか!

日時：10月18日（土）
19日（日）
10時～14時（両日とも）
場所：木曾川庁舎
（旧木曾川町役場）駐車場
内容：福祉バザー
作業所で働く仲間の製品販売
各種模擬店（みたらし・やきそば）
手作りのお菓子、コーヒー、
手芸品など
主催：社会福祉法人、きそがわ福祉会
きそがわ作業所

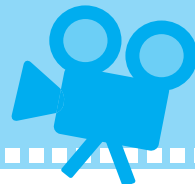


楽しい事いっぱい一緒に楽しみませんか

The Cinema Review of Welfare ～映画で“ふくし”を想う時間（とき）～ VOL5

今回紹介する映画は、「半落ち」

【2004年
日本映画】



あなたは毎日、何を糧にして生きていますか？

「私は妻を自宅で首を絞めて殺しました」と自首してきたのは、現職 警察官の梶総一郎（寺尾聡）だった。梶の妻 啓子（原田美枝子）は7年前最愛の息子、俊哉を急性骨髄性白血病で亡くした後、半年前からアルツハイマー病を患っていたが、梶の献身的な介護のもとで寄り添うように仲むつまじく生きていたのだが…。県警捜査一課の指導官、志木和正（柴田恭平）の取調べのもと梶は事件の動機、経緯について正直に話し、「半落ち」で終わるかに見えたが、一方で妻絞殺から自首するまでの「空白の2日間」についての証言を拒否する梶の姿があり、この状況に志木のみならず県警幹部すべてが困惑していた。

現役警部の殺人という事件が、県警自体の権威と、そこに付随する警察官の信用すべてが落とされる状況であった。梶は「空白の2日間」に何を考え何をしていたのか？

その謎を解くために、警察、検察、マスコミ、弁護士などが必死になって事件解明にむけて捜査をしていく。そこには急性骨髄性白血病で亡くした息子、俊哉、との深い関係が浮き彫りに…

自分の生活を取り巻く人々との関係において、そのかわりあい、交わり、支えあい、の中にあること自体が、つまるところは自分の人生の生きがい、糧となっていくことを考えさせられる、腹わたにジーンとした余韻が残る映画です。

「あなたが毎日生きるよりどころは何でしょうか？」「生きがいは何でしょうか？」友達ですか？それとも恋人？妻？子供？家族？ペット？いや、あなた自身の仕事ですか？夢？希望？趣味？それともお金？人それぞれ、十人十色でしょうが、即答できる人は少ないのではないのでしょうか？

少し寂しい言い方にはなりますが、人は誰でも1人で生まれて1人で死んでいきます。しかし、生きている間は1人ではありません。

この映画を通して、自分を取り巻くさまざまな人達との日常の「ふれあい」「感じあい」の大切さ、素晴らしさを感じることができると思います。

